

5 4 3 2 1

20 19 8 9

7 6 5 4

3 2 1 JAPAN

4 5 6 7

8 9 10 11

12 13 14

15 16 17

18 19 20

1 2 3 4

5 6 7 8

9 10 11



通俗排悶錄卷之四

友愛之部

目錄

張誠

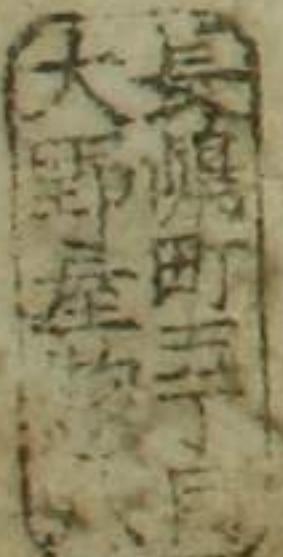
武君仕

達州民

仇大娘

童氏犬

合五種



13  
3144  
4

卷之四

通俗排悶錄卷之四

友愛之部

張誠

六樹園翁

譯

讀せうど。誠漸長せんちやうと親孝おやぢやう。兄を敬やう。兄うる訥が苦く。める忿おの忍しのび。陰かげ母おやを動おきむ。ども聽事きじ無なし。一日訥な山さんへ入いく。柴しばと伐なと。未終まつらざる。大おほき風かぜ。兩りょう小こ値ね。薪いにしだを負おく。歸かる。薪いにしだを母おや驗あらわす。薪いにしだ少すくな。と云いく怒いのや。食くを與よへ。訥な立たつく室むろへ入いく。臥居くわうぬ。誠師せいしの家いえへ帰かる。兄お怒いのや。愁うきる色いろを見うく。病いをやと問たずへ。兄お餓うと云い。其その故ゆゑを問たずへ。兄お斯このくと吉よ。誠聞きみく。公苦こう。公去こゝ。公去こゝ。暫まことにあり。解わかを懷いだふ。來く。兄おふ興おきふ。兄おひづこ。持もく。來く。つると。問たずへ。我わ竊ぬふ。小こ麥むぎの粉こと取と往むかく。鄰隣婦ふを借く。作つくら。先さき食く。とよ斯このと。言いふ。うう。と云い。訥な之のを食くて。弟おか。囑あく。と。曰い。此後これ斯このる。成な爲な。若事わざ。姑お女めを繕なぐらせん。我わ一日いちか一度いちど食くせ。飢うると死死する。や。至いたら。誠せいが曰い。兄おハ故ゆゑ。身み弱わく。貧ひせば。

正鴎まさくわの柴しばを刈さ。玉たまへんと云い。其その次の日ひ。竊ぬふ。山さんへ赴おもく。兄おが樵きりある所ところ。至いたる。兄お見み。驚おどき。汝汝來く。何なをう為なすと問たずへ。答こたへ。木木伐樵きりを助す。え。兄おが曰い。誰だ汝汝を遣おへ。弟おが曰い。我わ自じ來く。兄おが曰い。汝汝へ。おお薪いにしだを樵きりる。成な爲な。えん。や。縱よあ。能のと。猶よ可こり。連つふ。歸か。え。と。云い。も。誠せい聽き。毛け。と。柴しばを断き。と。兄おを助す。と。明日あさ。斧のこを。指さ。を。え。と。血あせ。と。匂にお。と。穿う。兄お悲ひ。と。曰い。安やす。速はや。帰か。ら。ま。べ。我わ斧のこを。以よ。自じ到いた。と。死死。う。ぞ。と。云い。ま。時とき。城しろ。師しの家いえ。至いたる。と。曰い。吾わ弟お。切き。け。と。能の。之のを。閑ひま。玉たま。山さんへ。入い。夏なつ。を止ま。玉たま。虎狼こひのの恐おそ。と。あ。と。云い。を。師し。言い。午ご前ぜん。何なへ。往むか。る。故ゆゑ

早竹古と折檣へと云々。訥家ふ帰りて城の謂を廢す。吾言  
を聽ぎて。師の竹台を受ふるよと云々。城尖くあるよりと答ふ。  
城翌日斧を懷みて山ふ入來ぬ。兄兄と駭く曰。我汝ふ来る事  
勿と云つる何ぞ又来是ると云へ共城應へむと薪と刈る。殊  
急と其業をうせど。汗流とて頤よて落り。漸く一束とあく  
ト辭せど。返りて師の家ふ至り。師責る事昨日の如し。城至  
の冬の告を。師も其賢うる嘆嘆と。乞ふ。山ふ往くを禁示せど。兄  
屢止めよと云へて聽び。日々山ふ來る。一日數人と山中ふ樵をう  
居る。虎走て来けど。衆人惧く伏て仆ま。中ふ虎城を脚と  
往きぬ。原来虎の入を負て行へ緩えゆく。訥ふ追つて。此時訥力と

斧を虎の脇ふ投く。虎痛く狂ひ奔走く。徃く之を追ひ  
ときとこそ及ぶ。訥虎を見失ひて返りて來て。哭く。弟  
我為ふ死しぬ我何ぞ生づる。と云。斧を取て自刎んと。衆人急  
き忙く留ましむ。斧の刃一寸計肉ふ入て血流る事涌が如し。衆駭  
く其衣を裂て創口を包み扶て家ふぞ帰る。母泣く訥を罵る。曰  
汝吾兒を殺せ。然るまに聊頸か割を付く。責を塞んともるやと云ふ。  
訥呻つて云。母入煩惱を至らる。弟死せ。我いふと生くあらんと云。  
其創痛まく眠る能へ。昼夜壁よ倚て坐し。哭を父へ此も又  
死すんと恐き。時て棺ふ就く。少しく哺ふ。牛氏見て詰責をば  
納遂に食せ。三日ありて饑死。村中ふ巫あり。常ふ冥土ふ徃來ま

者あり。訥夢おもか之ふ遇と第かく行方を問ふ。巫我聞事うそと  
訥を導すと徃時一皂衫やくさんを着る人の城中より出るわ。巫此人に向て  
其城じきの兵刃ひょうにんを皂衫やくさん人佩るる囊裏くわううちの中、よも牒とものとえ出だる。三日の中  
男女死せる者百餘ひゃくゆうの中、よも張氏りょうしある者ありと云。巫疑うなづく若他の牒の  
内うちあると問ふ。皂衫やくさん人の曰。此筋このへハ我支配いぢはいすと何ぞ差ふ事ことあらん。  
訥信せどく巫を強こわく城中じゆうちゆうへ入いまし。城中じゆうちゆう皆死失しつ者もの  
往来らいりようとくあ。故識きのこる入いて伐なれと就つく弟おとこを問ふ。未ま見みざと云。  
時とき小譁こまがく菩口薩至いた玉たまと言ふ。見えば空中くうちゅうの偉人けいじん也。毫光上下  
不徹ふてきせ。巫訥を猝とつく跪ひく。衆鬼しゆき觸騰さわぎする声地ごゑちを震ふる。菩口薩揚あ  
枝えだを以もつて偏甘露まんぐらを洒ます。其細ほそするる塵じんの如ごと。俄かくかを消け

如ごく失うせり。訥我創うの上う露あるやくよも痛いたを忘むせぬ。巫又導たどして  
俱そ帰きや來きぬと覺おえし。死死と二日あやしく竟くわく甦よる。父母おやに向むか  
く見る所ところを告めく。誠死せどして在あと云いふ。母おや造つり言いうと  
云いふ。又ののう。死死と罵の耻はず。訥創痕うを損ぬき良よく瘡う。力ちから起あく父おや拜まつ  
く。我わ今いま去はく雲くもと穿うち海うみへ入いく城しゆを尋ねねんと。弟おとこの達たつ  
我わ再な帰きら。願ねがへく父おや見みと以もつて死死せりと男おとこ玉たまと云い。翁おきな入い無む  
所ところ引ひ往むかく共ともの泣なく別わかれ。其そのと並そなへ此處しそく彼處ひそくと尋ねあり。畜くわへ  
盡ころぶべ乞う丐うと。行ゆ。年としを逾こく金陵きんりょう地じの達たつけけ。衣きぬへ皆みな敝ひき  
きき。道みちの傍そばの背せを曲まく物ものを乞う。官くわん長ながと見えく人ひと數うず  
具ぐく馬うま曳ひせく過くる人ひと。訥走はしとく側そばの避居さくゐける。其中うちの小駄こだつ

乗る。少青年をとて、屢々訥を顧み玉へ。訥其貴公子うらやみゆく。仰ぎ  
視るる姿せむ。少年の人馬を駐め下りて來て呼ぶ。吾兄やあらむ  
やとえへ訥首を拳て審ふ視き。誠うや嬉く走りて手を取て声  
かゝり計位。城も泣く云々。兄何漂落。斯ハ成玉へ。訥其  
情を言ひ。誠益悲く官長ふ白一とす。官長命じて訥を馬  
載せ。誠と唐を連絡て帰玉ひ。初山中ゆく虎の脚ある時、  
るのみうらりとなく路の側に捨置けり。誠も知らず氣を失ひて一夜  
臥居。傷が遍張千戸と云人。都へ來て此を過ぐ。其貌文わづ  
見そ憐く。身抱きをとべ。慟く。嘔く。叔載と共に歸  
く。傷處を療治させ。日を経て全く痊れ。千戸子無り。是が

誠と子とあらり。今日誘へきて物見ふ出。想へば内に逢ひ。誠  
道をうるの次第を逐ひ。訥ふ語る。斯と千戸納ふ對面も。訥拜  
謝。已ゆ。誠綿衣を捧て。兄ふ進め。酒を設く。物語も。千戸  
向ふ貴族の豫名ふかとて。幾度ぞ。訥曰親族ある。父へ  
原來弃。名へき。流寓。今豫ふ止。千戸曰僕も亦弃  
人。何の里ふ居。答曰。曾父の言と承。東昌各の  
轄。屬せり。と云ひ候ひ。千戸驚く。さては我同郷。何の故  
か。豫め。想ら。訥曰。前母のあふ掠め去ら。家ハ多火少焚  
き。家産を失。時先ふ西道名ふ賈。往來。熟せる所。是が  
小彼處ふ止。候と云ふ。千戸ゆく。驚く。君が父の名へいふと向ひ



訥文を告ひ。千戸はく顔を視て立て内へまぬ。何ぞくも  
 そく大夫入出く訥に向て曰。故は是張炳之が孫なり。訥然と  
 答へ。大夫入眼を目め受て千戸に向ひ。此段が兄弟ありと云。訥兄弟  
 其意を解さる事あ。大夫入曰我女が父の嫁。一と三年かして流  
 離。一と北山玄。身指揮役人の何某の縁。一と半年。内とく女が  
 兄を生め。又半年を過ぐ。指揮元ぬ。女が兄父の養とく  
 此官ふ遷。今任を解り。我常く郷里を念と。屢人を遣て齊名ふ至  
 らむ。且不見る所あ。何ぞ知らん。女が父西ふ徙。西の豫園。  
 と云く始終を詳く語。歯を以て序を。千戸四一。最長せり。  
 誓十六歳ゆく。最少あり。訥へ年二十。千戸はく神ゆぞうりふる。

千戸両人の弟をえく。惟ゆのちうこちのうど共ひ臥處を同く。一  
 朝夕親睦。叔共ふ帰る。計を作と時。大夫入牛氏の容。一  
 ぎうる。大夫人はと張氏が妻。うそと今。妻。牛氏が同居のうそ。あやいふとも。ひある。千戸曰聴。一。下々共  
 すむ。否玉々家を折つ。天下豈父無の。困わんやと云。是ふ於  
 て宅を鬻き。装を辨。日を撰。一。豫園へ。趣。既ふ其里の抵  
 き。訥誠先死。く父の報。父へ訥が去。妻も尋て死。唯  
 一入あり。影。外の伴ふ人も無。とよ。妻も尋て死。唯  
 そく喜ぶ。限。其故も。うと。元せりと想ひ。誠も歸來。其  
 愈敬。驚。喜。く物も。いふ。泣。程も。あ。千戸母子至。と  
 告。翁涼を輻。わだまふ。のまき。喜。も。や。悲。も。あ。

立まどひとぞ居る。千戸へ入て父を拜む。大夫入へ翁に向ひとぞ  
あり外う。此時媼婢廻卒入來と内外の堅いをき。翁より家の居  
あらうと。庭のあらうやぐ立あまとぞ居る。誠母をえざまく父に向  
けふ死せりと云づ。號嘯と岡絶しく慟か甦る。千戸謝をぬく  
樓閣を建つ。師を招く。両弟を教させむと。馬へ槽ふどり入へ  
室ふ満さき。やうすう大家の風ぞ備マス。

武君仕

河南洧川地の入の武君仕と云人也。其兄は君相と云う。少して  
縣尉目付の燈籠夫と。尉怒るのみとく之を責なまく。尉に向く  
曰。丈夫ハ殺まべ。辱む金うよと云う。遂め去く軍の従く往くるが。  
六

ヨヌく戰の功あらう。君仕は驃騎將軍の名。至ア。君相は遊擊將  
軍の名。至ア。君仕嘗て孫可望が敵將軍數十萬を對する軍  
騎ゆく二十餘人を率て陣を陷る。賊敵敢て逼らむ。兩翼の名  
を張て之を圍む。一騎還來て君仕已ふうち元一玉と告げば  
君相聞もゆき稍を奮て賊軍を走ア。入る。賊恐きて近うる者  
あ。君仕は賊を數々殺して凌ぎ。君相ハ斯共知らざ。東西を擊  
く。君仕も兄が坐ざる所と。復馬を躍らしく陣に入。兄弟  
両騎數十萬の賊中を突く。賊皆聲を巻く。眞の漢子を  
あ。と。うと譽け。又一日君仕賊と戦て。飛礮の中らを血流と  
みうき。即馬上ふ在と。兜を裂く。之を裹。敵と飛せつる賊成

生擒と歸て其脳を食たり。其勇敢此の如し。嘉善地の徐岳と人此傳を書焉を見聞錄が載る。徐岳此君仕と同年ゆく。癸亥の生あり年。一日燕坐して君仕が臉上の瘡瘍と見る。何ぞ斯累く所と問う。君仕徐岳が手と引く之を按せると内を皆細き鉄珠子あり。又衣を脱て腰肋の間を示す。鉄珠大く垂く。背上傷痕鱗の如し。徐岳も興あく。實ふ百死の中を経る男也。

けよとぞ感トク矣。

### 達州民

四川の達州の民某と云者。兄弟二入甚友愛也。弟第一室成娶らざ他出なく有る。其兄身を賣て十二金を得て。弟の為ふ

婦を娶らんとて聘を遣す。弟帰て婦を娶ア。兄が身を賣てと知り。又あひざれ。と。然知く。兄と相持く泣き。さて其婦を母の家へ遣す。原の聘金と取ら。兄の身を贖へんと。湖南地の流民二人。其事を知る。婦ふ尾と往く中途で婦を殺す。其金を攫ふ。去らんとする。俄ふ迅雷大ふ震二人を殺す。立どろば斃せり。其戸共婦が家の門か跪く。中か十二金をねぐら居す。頃ありて婦復甦と其家の帰至る。二入の者早門外か跪く。有る。婦其故を語りけど。兄弟へゆき。鄰里列入來く觀る者堵の如く。堵のぞ。前より。嘆して異とせざる者無し。

### 仇大娘

仇仲ハ晋国の人也。其郡邑を知らず。世の亂に遇て寂ありの如く

傍へらる。挈らむと往ぬ。二人の子ある。兄を福と云ひ弟を禄と云く  
共ふ初一。繼室へ邵氏あり。両人の子を愛み育てんとす。幸ふ貴業  
全くと飢寒の憂あつり。然るふ連年飢饉うち續々上ふ豪  
強うる者女主うる爲悔と。無理を乞ひかどめ取る事ヨア。仇が  
叔父尚廉と云者あや。其嫁せんうの有利と。屢々勧とぞ。邵氏  
志を矢と搖ふと。叔父尚廉利を食らんとす。尚廉嘗ふゆる大姓ふる金  
と。を取て券を遣す。邵氏を強く大姓ふ送らんとし。又茲の同姓の  
人ふ魏夙と云者仲と昔て不和うる。一ゲ仲が妻の邵氏寡と  
成たる見と。さゑぐ浮言を造りと。言弘と。大姓聞く邵氏と  
不徳ありと嫌と迎る。更を止む。邵氏慚ゆきと聞知と。共寃と

述る所あく。獨うち歎く朝夕隙を隕一居ふが。竟見ふ病と成  
く。四肢自在うむ。床榻ゆく臥居家。福年十六ふ成けと。急に  
婦を娶らせたり。姜秀才。秀才前う。此膽が女うりう。性賢能ふ  
と。經紀ふ賢うと。家中いふく裕ふうと。弟の禄をぞ  
師ふ從へせと。書を讀せう。魏夙ゆく忌嫉と。陽の睦くと  
頻ふ福を招く酒を飲せう。其猶ふ衆じく曰尊堂病玉ひと。生産  
を理る事能へど。弟坐うづく食を。且婦を娶らばいよく大耗と云  
矣。君が爲ふ計ふ。早く家を析んゆく如ドと。勧む。福帰と。婦ふ  
謀ふ。婦あらゆうと。事うりと。叱つて母の告ぬ。母怒すと詬罵一  
福も下ふ恚と。輒家うる。金錢を他入の物の如く思ひ。漫ふ之戒

遣ふ魏夙之を誘ふと博賭をうさせたり。倉の栗漸空く成り糧  
も絶え至りけり。母憤怒共せんと無し。遂に家財と分て遣  
き。辛み妻女賢ゆく飯を炊く母仕ふ福家を分ちくらや  
まく。益憚ぞ博賭をう。數月の中佃産悉債と取らる。計を立て所見  
ふ至まう。因マリく妻を券とう。財を貸さんと妻を共承引する者  
無し。邑人ニ趙閻羅と云者。ひと網を漏らす巨盜あり。是を  
伏く心よく貰と出へと福が假名。數日めぐく又之を失へ。券の  
盟か背違とせ一ヶ趙目を大きく成く責をと。福大の惧と妻を  
賺へて趙宅へ遣き。魏夙やく竊ふ喜び急奔く妻家を告  
つ。其意ハ仇氏の家を敗らんと。妻秀才の夫を官の訟ふ。福惧き

る甚ぐ止く行方無き。妻女趙家。福至く始く皆の欺  
をく。然知く。大の哭一死せんとき。趙慰め諭せども聽ざ。威  
を以て逼まで益罵る。怒く鞭うてども終く服せど。笄を抜くと自喉  
を刺ぬ。急に救はれど其已の食管が透かれ。血溢き出る事あく。  
趙帛を以て其頸を束ね。猶冀へ從容之をうびと。然  
ふヨ立日牒至アラル。妻秀才の訟て。趙閻羅さるのるを物とせず。そ  
れ。官女の傷の重を驗玉ひ。命トシく趙を召して。お詫相共  
ふ目をえせく更に刑を用ひ。趙が累ふ。官趙閻羅。横暴を人く笑  
居。大の怒く家人を喚かれて。立づく。立づく。立づく。歎き。妻  
氏遂に女を昇く家の帰る。妻が訟し。伏貸と邵氏始く福が不肖

の状を知り。嘑哭と息絶る。至もて弟の禄時。年十五。夫。  
只一人。わざと成る。死方。是れ。而も先仇仲。前室の生る女の大  
娘。と。わざと。遠郡。嫁。徃。而。其性剛。と。男ふさぎ。よる。  
娘。と。わざと。遠郡。嫁。徃。而。其性剛。と。男ふさぎ。よる。  
歸寧。と。父と。忤。と。貴く。帰。多。父の仇仲。も。之を。惡。と。且。道も  
遠。金。不。年。を。経。と。ども。存向。も。為。ざ。邵氏。危。な。望。多。而。魏  
風。ふ。の大娘。を。招。う。必定。争。ひ。を。起。ま。べ。と。思。と。商人の。便。ス。吾を  
寄。と。大娘。ふ。告。遣。り。果。と。大娘。少子。を。挈。至。て。と。門。ふ。入。せ。じ。  
幼弟。一。母。の。看。病。と。居。て。家の。さ。よ。あ。へ。と。寂。一。げ。う。弟。の。福。ハ  
と。問。夫。禄。脩。ふ。之。を。告。り。大娘。忿。氣。呴。ふ。塞。ア。と。日。家。ふ。成。人。無。一  
そ。斯。や。と。ぐ。人の。蹤。躙。と。ふ。至。ま。る。吾。家。の。田。產。諸。賊。何。ぞ。賺。め。多。

る。が。得。ん。と。と。忿。と。出。と。邑。ふ。詣。ア。状。を。口。玉。と。訟。ふ。諸。博。徒。大。ふ  
惧。と。金。を。出。と。大。娘。又。賂。入。大。娘。其。金。を。受。と。仍。之。を。訟。ふ。邑。令。博  
徒。の。何。某。等。を。拘。各。杖。を。加。へ。是。た。田。產。の。事。ハ。置。く。問。ひ。ざ。ま。う。と。  
大。娘。子。を。寧。と。郡。守。ふ。公。と。訟。ふ。郡。守。最。博。を。惡。ミ。玉。ハ。上。と。大。娘。  
委。く。寡。の。家。の。か。ち。く。悲。た。る。又。惡。徒。共。の。工。ハ。逢。一。次。第。を。述。矣。バ。  
郡。守。大。ふ。動。ト。く。書。付。を。以。く。罷。縛。ふ。命。ト。く。田。を。以。く。仇。氏。ふ。返。ト  
給。ア。仍。仇。福。を。免。と。う。ち。く。と。不。肖。を。儆。め。よ。と。い。邑。宰。令。成  
奉。と。穿。鑿。あ。り。室。を。故。の。産。盡。返。ア。ね。大。娘。已。久。寡。を。乃。  
少。子。を。遣。と。家。ふ。帰。う。且。從。兄。ふ。囑。と。業。を。務。一。き。復。來。る。事  
う。と。云。付。多。此。よ。母。の。家。ふ。止。す。と。居。と。母。を。養。ひ。弟。を。教。ふ。内。

外より治と母の心大ふ慰と。病も漸瘥る所至也。家務ハ悉大娘  
内委ねる。里中の豪強少く凌暴せんとす。大娘刀を取て其家  
に至り。争ひ論どく屈服させらる事。斯く年々も細縫日  
み増豐みたり。時く藥餅珍肴を買く。妾女のウス餌を遣す。  
又禄が長成せるを見く。頗る媒の囁く。之が為の婚を不見ゆとも。魏  
風人の告ぐ曰。仇家の産業悉大娘の属せり。恐らく其將來復返さず  
と云。是れ人皆之を信ト。婚をせんと云者うそをけり。此の后公子  
子文と字す。晋第一。晋の中の名園也。晋第一。晋第一。晋第一。晋第一。  
園中の名花路を夾く直る内室の通也。或人知らざり。悞く闇の  
入公子の私宴の處。内室に至り。怒く執へて盜ありと云ふ。杖ゆく

死ぬぞう打め一事あ。時ふ清明とく三月の節あり。禄師の家  
よや帰り。魏風誘く共遊びて彼園の所。魏の園丁を相知ふ。園中入へを。周く亭榭を。和名抄三亭ハ  
石ラヤ。同書臺榭ノ佳土高キ。歷く一處に至る。溪水凶勇しく。画橋朱檻  
日臺有屋曰榭。和名ウテナ。ありく一つの深門。通せり。遙か門内を望めば。繁榮花錦の如し。是公子の  
内齋也。魏之を給く。君諸先へ。我彼處ゆく。溺用。とく往ん  
とく別。是れ禄心つゞぎ往く。女郎の笑声聞こ。一人の婢  
やく窺見く。即ち入へ。禄始く駿奔らんとす。公子出来く。家人を  
叱り。之を逐へ。禄大ふ窘らじ。もせんと無る。自笑中の身を  
投。公子怒を返り。笑とす。諸僕の命。とく引出。其容の端雅



あひて見ゆく其衣履を易き。其姓氏を問ふ。殷勤を盡せり。俄に起入  
そやうく旋ちて打咲ひ。禄がみを握て漸曩の所不達ふ。禄遂巡  
とへて敢て入らむ。公子強て曳て入る。化外離の内隱々と美人  
あやしく窺ひて居る。既に坐をと群の婢酒を進む。禄辭  
く曰。童子知無して候て廻廻に入まね。赦宥を蒙る。望外不  
出。但願へくも釋て還。王の恩を受る事淺かる。と云へ。乎。公  
子聽う。暫て看候。紛る。禄又起て十分ふ醉と云ふ。醉と辨す。  
公子強て坐せ。あ笑て曰。我一句あり。若此句の對を作。君を放ち  
そ歸らん。禄其句へんと向ふ。公子曰。柏名渾不似。と。禄默然  
きる。良久へて對曰。銀成役奈何。と。渾不似。琵琶似。樂器あり。役奈何。不似。

モニ公子大ふ竹矢と真の石崇うりと云。晋の石崇字は季倫。と云。人ゆく王慷慨  
禄公子の詞を解せど。是モ公子小女也。名ハ蕙娘といひ。美ゆく  
書を知らず。良耦を擇ゆんとぞ。昨夜の夢かふ一人告ぐ曰。石崇へ  
汝が婚うと云ふ。何ふ在る。と問ふ。明日水落んと云ふ。起て父ふ  
告ぐ。共ふ異あり。とちが。禄よく夢兆ふ符を。斯處く内舍み  
入夫人。女輩。よく共ふ覗へしめなる。公子喜く曰。柏名へ小女う  
ゆく所ゆく。屢思へども其偶無し。今属對を得つても亦天縁ある。  
僕息女を以て其弟ふ奉せんとぞ。箕帚へとまう。口がむまく。寒舍貧  
卑下。と云ふ。第宅みえく。引取るのみ及ばざと云ふ。家も廣けま  
まづ居ゆく。帰る。禄惶然とて辭て曰。今家ふ老母ゆて病めり。

入贅と成事能へどと云ふ公子姑歸く謀玉へとく。遂に園人を遣  
て湿衣を負せ。馬か衆く帰一色。禄帰て來く母が告げど。母  
驚く余アのうづ不祥と。是が至ア始く魏氏が公の恐れたる  
を知りぬ。さきども凶因ア吉をえし。其傍かさす置く。斯る者  
え遠ざかり。交る更勿也と母戒る。數日を踰く公子又人を来ら  
一あく母が言へむ。母終ふうづがど。大娘之を應く。即二人の媒を借  
く納采の禮を。日を撰く公子の家へ入贅と。年比有と禄  
學向か長ド才名も世ふ。聞え。妻の弟生長一ケト。惠娘が弟生長  
きも禄婦を携く。家へ歸アね。母病少く怠く杖か倚く。步行せ。大娘  
の經紀ふ頼く。第宅も完うる上。新婦入來く。婢僕雲の如く。まづ  
一

大家の風ありけ。魏之を貰く益嫉めども害を送る意見を。時  
時ア巨盜ア。事發く。遠地へ遣らる。時。禄又財を寄官と誣き。是  
ち魏が計る所ア。禄ハ閑外。外放。走る。愈えふ。而。魏  
細産ハ盡没收せ。官庫へ入る。危公子上下の賄へ。僅か惠娘  
を免て。幸か大娘産を折の書を執ア。官が申へ。母子  
星ひ。星ひ。災を免玉。新か増せる良田許ヨア。恩福が名ふ。みゆき。母女  
始く安ト居る事を得。禄又え返るやド。身うりと思ひ。母女  
離婚書を寫く。岳家へ遣。獨北都をあへ。そぞ往。旅肆の戸外  
み弓子の乞ひ。とて。兄の類せ。近づく。問。果して  
兄あけ。兄弟相共かみを取く。有一。ある。語ア。と立。禄衣を

解金を分く福か與へ早く家ふ帰り王へと言ひ福之を受く泣々  
別そぞ徃る。禄ハ關外ふ至く將軍の帳下廻外を守る將軍よ身を寄  
く一卒と成レバ文弱あやぢうど文籍のる底主おもねめ。諸僕と同く棲  
しむ僕わが輩ともだち相共ふ嫁よめ世よせを研くわ究くわめ。禄悉之を告ごうべ内一人  
驚おどろく是足吾兒こどもうやと云ふ是ハ父おやき仇ご仲なか弟つぐ。初め寇こう小馬こまを捕つかふ。父おや  
捕つから小馬こまを牧まく有あレ。寇こう逃竄とうせん去はなく後遂こうすいに關外かんがいの徙うが。將軍の僕  
と六ろく弟つぐとけ。禄ろく又また向むかく其由ゆを語かたひ。始はじく眞まことの父おやきの知し。首を  
抱いだく悲哀ひあいト且また相喜あいく。幾いくともあらず。將軍拒盜きぬぎ數十人そじゅうじん伏獲ふく  
け。内うちの一人ひとハ曩なほの時とき魏魏の賴より。禄ろくを誣まう盜とう賊ぞくあり。父子泣なみだ泣なみだ將軍じょうぐんの訴うそ。將軍之のが爲ためか寛ゆるを雪ゆ。上う聞きか達いた。上う方がた官くわん

命めいせく。没入ぼくにゆする仇氏ごうしの細姫さいひを返た。王へる仇父ごうふ子こ喜び事  
限かぎ。禄ろくを旅装りょしやうをしてぞ帰か。母おや兄あの福ふくの弟つぐ。家いえ  
帰かア。蒲かば伏ふーと入いる大娘だいな母おやを堂上どうじょう坐す。め杖くわを取とく福ふく曰い。  
責せを受うけん。大娘だいな願ねがひ。姑留おとめひ。然ちがう。然ちがう。早は去は。福ふく曰い。  
懲こころもふも足あら。宿案しゆあん未消みけいせざる。若再犯わかつま。官くわんよそ首免しゆめん  
とく。即入そくにゆを遣けく。妻女さいじよを告ごく。妻女さいじよ罵の。曰い。我わをを仇ご氏しの何なん人ひと  
ゆゆ。玉たまふか。いろの衣き。聞き。大娘だいな。妻女さいじよ罵の。曰い。我わをを仇ご氏しの何なん人ひと  
福ふくをあざけ。もあづ。而とく。福ふく慚くじかく取とく。言い。居ゐ。事こと半年かんげん。大娘だいな  
福ふく。大娘だいな。衣食等いじゆとうを惠めぐらす。丁寧ていねい。役わくをきこ。むづづき。

僕と同くせり。福出精一とひそもう怨める色す。金錢をあつてき  
共聊も苟ちうむ。大娘其他無き察しと母か白し。妻女を求め  
と復帰せしめんと云ふ母恐らくちのを返し難くんと云へた。大娘  
曰然も彼女ニ主よ事る心あらば。曩自害と云理す。然に及  
福ふ賣きうる。忿るが無より非ドと云く。大娘遂に福を率て  
躬往く負荆をす。岳父母きびしく福を責くゆ。大娘叱く張  
跪せしむ。斯と妻女ふ見えしめんとぞふ。再三云へ共女出せ。大娘内  
ふ入さず捉え之を出せ。女福を見く罵く責む。福汗よもぐく  
居る不堪。妻が母始く福を睨く起て大娘歸る。翌日を問ふ女  
が曰向か姉の恵を受ふ事厚し。今尊命を受く山宣異言あし

や。但恐らうと此入欺ざるのを保らう能ヘド。且恩義已ぬ絶し  
む。何ぞ腹黒。無類子と共よ世を渡る。寧や願ぐも別室を構  
え。妾を置王。徃く老母ふ事へん。然く大娘と成る。勝也。大娘  
福ふ代く後悔を述へ。翌日と云約をすこぞ帰る。翌日衆輿を遣り  
と妻女を衆く帰らし。母門を立迎く跪く辨をと。女ハ地伏  
そ大か哭。大娘之を勧く酒をかく。歡をも。福を案の側に坐  
せしむ。大娘爵を執く言ふ。曰我苦争へ。自利も。非也。今  
身退く悔。貞婦復還の上。薄藉を渡し。やあらせん。我一身をつ  
來り。仍一身を以て去。夫婦席を起容を改て辨  
一泣く止む。大娘夫婦が止むふ。任せく止や否も居ける。月代経ぞ

そ禄が冤の頭をうる命下ア。數日あとどく田宅悉故主か還り  
ぬ。魏大駿と其故を知り。自術の復施を乞ひろの無を恨み。時  
思よど西鄰の火あらと焚せぬ。魏火を放ふよ托へと徃く。暗  
禄が家火をつけて焚んを。風暴起ア。延焼へと大方焼盡せり。  
止福居西三屋を餘せる。家舉と其中の取衣ア。とぞ居る。斯る程  
み禄帰来。宜ア。皆く相見と泣喜る。最初危公子離書を得く  
蕙娘が見せたり。蕙娘痛哭と引裂く地に廢り。父其志の従く  
復嫁を言ひてあり。禄帰と女やまと嫁せると。喜く岳の  
所れ往ね。公子其家の焚うるを知り。苗んとと共禄辞へと退院  
なり。大娘幸が蓄房金あとをも。敗る堵をつくと。福錦  
帰ぬ。

を貰く自營菜くと。鍔を埋一窖ふ掘ゆく。夜泉と共に之を  
發け。石池一丈計ふりと盈貯へと。是ふ由く工の命と大又  
樓舎を作る。社麗あるの類ア。禄も將軍の義不感ト十金をそ  
東く往く父を贖へんと。福我もそ性あとく惜く出立けと。健  
き僕を添く遣り。禄は蕙娘を迎へ。昔の如く睦しく居ア。俄  
ちわざと父兄同く帰り來ぬ。門の款び言べ愚うる。大娘母  
の家へ引駆せり。やと我子を禁く来るのあらじ。私あらんと人  
の疑へん。恐くえ父既み帰ふま。堅く辯へと去らんと云へ。兄  
弟之を聽者ア。父乃縫を二ふ折。二を兄弟ふ與へ。一を大娘ふ  
與ふ。大娘固辭へと受ざむ。兄弟泣く。吾等妹のたゞ争今日

あんと云く。強く之を勧む。大娘漸やまく羨引ぬ。其のやう子を招  
きく家ふ移へて共ふ住けり。或大娘ふ向。異母兄弟の為ふ志哉  
尽を事わ何ぞ斯ぢや切うや。大娘曰。母有る事を知く父有る事  
知らざる。是禽獸也。豈入子とく之の效ひんやと云ふ。福禄之を廻  
く皆歸を流せや。工入をも其弟を作らせく。悉已と等く建づ  
け。魏夙自思ひ八十餘年以來仇家ふ禍を成さんと一々皆福と之  
成さんとく。深自愧悔。又其富を作らせく。悉已と等く建づ  
く。種々の品を仇仲きゆうぢゆうが方ふ持行く。賀を述べ。仇仲きゆうぢゆう雞酒の事と受  
け。此雞布を以て足を縛まつ有あ一いつ。逸いつして竈ふへまべ其布  
を。此雞布を。其儘巣く積たまる薪の上ふ止まり居ゐ。俄わて  
火ひをうち。然るふ其儘巣く積たまる薪の上ふ止まり居ゐ。俄わて

焚ひあづく舍ひふ火ひは死ぬ。辛さふ人ひとよろくゆゑく摸滅ぼうめつけど。厨中くりやの  
器物きものハ皆焚失ひのき。其後仇仲きゆうぢゆうが壽の賀の時。魏又羊と贈もたらひ來きり。  
之を返かへさんとを共かあづく。羊を庭の樹じゆふ駁むけり置おきふ夜僅  
の僕わらわス敵ごんきうるきうるが忿いのりく樹下じゆげふ徃ひき。羊の索しもと解ほどく経たどて死ふけや。兄お兄お  
嘆なげト曰い。其之の福ふくあるも之の禍わざわざふ如おぞと云い。其後魏わいが方かたを  
りふ殷勤おんじんの言ことふれども其ちの一ひとつをざふ受けうけつけり。後魏わい老おそ貧ひんく  
一ひとつの丐がいと作つくひ不憚ふかん。憚のふく布粟ふそくを衣きぬと與よ。恩おんを以もつて報むく。

## 童氏大

咸溪けんけい地じの童鑄どうとうが家いえふ二に大だいを畜く。一いっ白しらく一いっ花はな。共とも一いっ母め犬いぬの  
生うむ所ところ。性せい狡猾こうら。一いっくく人の意いを知し。後あと白しら犬いぬ忽こ目め盲もう急きき。

ふ依アミ牢ふ入アミ食事能ヘゼ。主人草ト簷下の籍ト臥テム。花大  
日ひ小飯を啣く。徃ゆ吐ぬ之を飼う。夜よ其そ側わきふ臥お。白犬死むけ  
れバ。主人之を山さんの麓ふもと埋う處ところ。花大朝夕徃ゆ其そ處ところを遠とほる。故廻まわト  
位お拜あ。其傍そば臥お。時とき移ゆ返かとねん

通俗排悶錄卷之四了

